

雑記（1 [#「1」はローマ数字、1-13-21]）

寺田寅彦

青空文庫

一 日比谷から鶴見へ

夏のある朝築地^{つきじ}まで用があつて電車を出掛けた。日比谷^{ひびや}で乗換える時に時計を見ると、まだ少し予定の時刻より早過ぎたから、ちよつと公園へはいつてみた。秋草などのある広場へ出てみると、カンナや朝貌^{あさがお}が咲きそろつて綺麗^{きれい}だった。いつもとはちがつてその時は人影というものがほとんど見えなくて、ただ片隅のベンチに印半纏^{しるしばんてん}の男が一人ねそべっているだけであつた。木立の向うにはいろいろの色彩をした建築がともに朝の光を浴びて華やかに輝いていた。

こんなに人出の少ないのは時刻のせいだろうが、これなら、いつかそのうちにスケッチでも描きに来るといいという気がした。

四、五日たつてから、ある朝奮発して早起きして、電車が通い始めると絵具箱を提^さげて出かけた。何年ぶりかで久し振りに割引電車の赤い切符を手にした時に、それが自分の健康の回復を意味するシンボルのような気がした。御堀端^{おほりばた}にかかった時に、桃色の曙光に染められた千代田城の櫓^{やぐら}の白壁を見てもそんな気がした。

日比谷で下りて公園の入り口を見やった時に、これはいけないと思った。ねくたれた寝^ね衣^{まき}を着流したような人の行列がぞろぞろあの狭い入口を流れ込んでいた。草花のある広場へはいつてみるといいよ失望しなければならなかった。齒磨楊枝^{ようじ}をくわえた人、犬をひっぱっている人、写真機をあちらこちらに持ち廻って勝手に苦しんでいる人、それらの人の観察を享樂しているらしい人、そういう人達でこの美しい朝の広場はすっかり占領されていた。真中の芝生に鶴が一羽歩いているのを小さな黒犬が一足吠^{びき}えついていた。

最も呑^{のんき}氣^きそうに見えるべきはずのこれらの人達が今日の私の眼には妙にもものしい行列のように見えた。大劇場のpromナードを練り歩く人の群のような気がした。そして世の中に「閑な人」ほど恐ろしいものはないという気がした。自分がやはりその一人である事などは忘れてしまつて。

裏の方の芝地へ廻つてみても同様であつた。裁判所だか海軍省だかの煉瓦を背景にした、まだ短夜の眠りのさめ切らぬような柳の梢に強い画趣の誘惑を感じたので、よほど思い切つて画架を立てようかと思つてみると、もうそこらを歩いている人が意地悪く此方^{こつち}へ足向け始めるような気がする。ゴーゴルか誰かの小品で讀んだ、パンの中から出た鼻の捨場所を捜してうろついて歩いている男の心持を想い出した。

あきらめて東京駅から鶴見行の切符を買った。この電車の乗客はわずかであったが、その中で一人かなりの老人で寝衣のようなものを着て風呂敷包をさげたのが、乗ったと思うともうすぐに有楽町で下りた。これはどういう訳だか私には不思議に思われた。事によるとこの人は東京駅員で昨夜当直をしたのが今朝有楽町辺の宿へ帰って行くのではないかという仮説をこしらえてみた。そう云えば新橋で下りる人もかなりあった。これもどうい人達か見当が付かない。

汚いなりをした、眼のしよぼしよぼした干からびた婆さんと、その孫かとも見える二十歳くらい、大きな風呂敷包の荷をさげた、手拭浴衣てぬぐいゆかたの襦袢じゆばんを着た男が乗っていた。話の様子で察してみると、誰かこの老婆の身近い人が、川崎辺の病院にでもはいっていて、それが危篤にでも迫っているらしい。間に合うかどうかを気にしているのを、男がいろいろに力をつけて慰めてでもいるらしかった。こういう老婆を見ると、いかにも弱々しく見える一方では、また永い間世の中のあらゆる辛苦に鍊え上げられて、自分などがとても脚下にもよりつかれないほど強い健気けんげなところがあるように思われて来る。そしてそれが気の毒なというよりはむしろ羨ましいような気のある時がないでもない。

鶴見で下りたものの全くあてなしであった、うしろの丘へでも上ったらどこかものにな

るだろうと思つて、いい加減に坂道を求めて登つて行つた。風が少しもなくて、薄い朝あさ靄やを透して横から照り付ける日光には帽子の縁は役に立たぬものである。坂を上りつめると広い新開道があつた。少しあるくと道は突然中断されて、深い掘割が道と直角に丘の胴中を切り抜いていた。向うに見える大きな寺がたぶん総持寺そうじというのだろう。

松林の中に屋根だけ文化式の赤瓦の小さな家の群があつた。そこらにおむつが干したりしてあるが、それでもどこかオルガンの音が聞えていた。

まだ見た事のない総持寺の境内けいだいへはいつてみた。左の岡の中腹に妙な記念碑のようなものがいくつも立っているのが、どういう意味だか分らない。分らないが非常に変な気持ちを与えるものである。

暑くなつたから門内の池の傍のベンチで休んだ。ベンチに大きな天保銭てんぼうせんの形がくつつけてある。これはいわゆる天保銭主義と称する主義の宣伝のためにここに寄附されたものらしい。

絵でも描くような心持がさっぱりなくなつてしまったので、総持寺見物のつもりで奥へはいつて行つた。花崗岩みかげいしの板を贅沢に張りつめたゆるい傾斜を上りつめると、突きあたりに摺鉢すりばちのような池の岸に出た。そこに新聞縦覧所という札のかかった妙な家がある。

一方には自動車道という大きな立札もある。そこに立つて境内を見渡した時に私はかつて経験した覚えのない奇妙な感じに襲われた。

つい近頃友人のうちにケンプエルが日本の事を書いた書物の挿絵を見た中に、京都の清きよ水みづかどこかの景と称するものがあつた。その絵の景色には、普通日本人の頭にある京都

というものは少しも出ていなくて、例えばチベットかトルキスタンあたりのどこかにありそうな、荒涼な、陰惨な、そして乾き切つた土地の高みの一角に、「屋根のある棺かんきゆう 柩きゆう」

とでも云いたいような建物がぼつぼつ並んでいる。そしてやはり干からびた木乃伊ミイラのような人物が点在している。何と云つていいか分らないが、妙にきらきら明るくていて、それで陰気なおどろおどろしい景色である。dismalとか weirdとか何かしらそんな言葉で、もつと適切な形容詞がありそうで想い出せない。

総持寺の彫ぼうだい太な建築や記念碑を見廻した時に私を襲つた感じが、どういうものかこのケンプエルの挿絵の感じと非常によく似ていた。

摺鉢形くぼちの凹地の底に淀んだ池も私にはかなりグロームリーなものに見えた。池の中島にほうけ立つた草もそうであつた。汀みぎわから岸の頂まで斜めに渡したコンクリートの細長い建造物も何の目的とも私には分らないだけにさらにそういう感じを助長した。

ずっと裏の松林の斜面を登って行くと、思いがけなく道路に出た。そこに名高い花月園かげつえんというものの入口があった。どんなにか美しいはずのこんもりした溪間たにまに、ゴタゴタと妙な家のこけら葺ぶきの屋根が窮屈そうに押しあっているのを見下ろして、なるほどこうしたところかと思つた。

西の方へ少し行くと、はじめて自然の野があつて畑には農夫が働いていた。しかし一方を見ると、大きなペンキ塗の天狗の姿が崖の上に聳そびえているのに少なからず脅かされた。

帰りの電車はノルマルに込んでいた。並んで立っていた若い会社員風の二人連れが話しているのを、聞くとともに聞いてみると、毎朝同じ時刻に乗る人がみんなそれぞれ乗り込む車の位置に自ずからきまりがあると見えて、同じ顔が同じところいつでも寄り合うようだと云つていた。そうかもしれない。しかし同じ顔を見た時の印象が、見なかつた時の印象を掩蔽えんぺいしてそう思わせるのかもしれない。

品川から上野行は嘘のように空いていた。向い側に小間物を行商するらしい中年女が乗つて、大きな荷物にもたれて断えず居眠りをしていた。浴衣の膝頭に指頭大の穴があいたのを丹念に繕つたのが眼についた。汚れた白足袋の拇おやゆび指の破れも同じ物語を語つていた。相場師か請負師とでもいったような男が二人、云い合わせたように同じ服装をして、同

じ折かばんを膝の上に立てたり倒したりしながら大きな声で話していた。四万円とか、一万坪とか、青島^{チンタオ}とか、横須賀とかいう言葉が聞こえた時に私の頭にはどういふものかさつき見た総持寺の幻影がまた蘇って来た。

兵隊が二、三人鉄砲を持つてはいって来た。銃口にはめた真鍮^{しんちゆう}の蓋のようなものを注意して見ているうちに、自分が中学生のとき、エンピール銃に鉛玉を込めて射的^{しゃてき}をやった事を想い出した。単純に射的をやる道具として見た時に鉄砲は気持のいいものである。しかしこれが人を殺すための道具だと思つて見ると、白昼これを電車の中に持ち込んで、誰も咎める人のないのみならず、何の注意すらも牽^ひかないのが不思議なようにも思われた。結局絵は一枚も描かないで疲れ切つて歸つて来たのであつた。しかしケンプエルの挿絵の中にある日本を思いがけないところで見付け出しただけはこの日の拾い物であつた。

二 雅楽

友人の紹介によつて、始めて雅楽^{ががく}の演奏というものを見聞する機会を得た。

それは美しい秋晴の日であつたが、ちょうど招魂社^{しょうこんしゃ}の祭礼か何かの当日で、牛込見

附のあたりも人出が多く、何となしにうらかに賑わっていた。会場の入口には自動車や人力じんりきが群がって、西洋人や、立派な服装をした人達が流れ込んでいた。玄関から狭い廊下をくぐって案内された座席は舞台の真正面であつた。知っている人の顔がそこらのあちこちに見えた。

独立な屋根をもった舞台の三方を廻廊のような聴衆観客席が取り囲んで、それと舞台との間に溝渠こうきよのような白洲しろすが、これもやはり客席になつてゐる。廻廊の席と白洲との間に昔はかなり明白な階級の区別がたつたものであらうと思われた。自分の案内されたのはおそらく昔なら殿上人てんじやうびとの席かもしれない。そう云えばいちばん前列の椅子はことごとく西洋人が占めていて、その中の一人の婦人の大きな帽子が、私の席から見ると舞台の三分の一くらいは蔽おほうのであつた。これは世界中でいつも問題になる事であるが、ことにあゝいう窮屈な場所では断る事にした方が、第一その婦人の人柄のためにかえつてよくはないかと思われる。

一段高くなつてゐる舞台は正方形であるらしい。四隅の柱をめぐつて広い縁側のようなものがある。舞台の奥に奏楽者の席のあるのは能楽の場合も同様であるが、正面に立てた屏風は、あれが方式かもしれないが私の眼にはあまり渾然こんぜんとした感じを与えない。むしろ

ろ借りて来たような気のするものである。

烏帽子直垂えぼしひたたれ

とでもいったような服装をした楽人達が色々の楽器をもって出て来て、あぐらをかいて居ならんだ。昔明治音楽界などの演奏会で見覚えのある楽人達の顔を認める事が出来たが、服装があまりにちがっているので不思議な気がするのであった。

始めに管絃の演奏があつた。「春鶯囀しゅんのうでん

」という大曲の一部だという「入破しゅは」、次が

「胡飲酒こいんしゅ」、三番目が朗詠の

一つだという「新豊しんぽう」、第四が漢の高祖の作だという

「武徳楽ぶとくらく」であつた。

始めての私にはこれらの曲や旋律の和声がみんなほとんど同じもののように聞えた。物に滲み入るような簫しょうの音、空へ舞い上がるような箏ひちりきの音、訴えるような横笛の音が、互いに入り乱れ追い駆け合いながら、ゆるやかな水の流れ、静かな雲の歩みのようにつづいて行く。その背景の前に時たま現れる鳥影か何ぞのように、琴や琵琶びわの絃音が投げ込まれる。そして花片の散り落ちるように、また漏刻ろうこくの時を刻むように羯鼓かっこの音が点々を打って行くのである。

ここが聞きどころつかまえどころと思われるような曲折は素人しろうとの私には分らない。しかしそこには確かに楽の中から流れ出て地と空と人の胸とに滲透するある雰囲気のような

ものがある。この雰囲気は今の文化的日本の中では容易に見出されないもので、ただ古い昔の物語でも読む時に、わずかにその匂だけを嗅ぐ事の出来るものである。

始め西洋音楽でも聞くようなつもりで、やや緊張した心持で聴いているうちに、いつとなしにこの不思議な雰囲気に包み込まれて、珍しくのんびりした心持になった。メロディなどはどうでもよかった。ただ春の日永の殿上の欄にもたれて花散る庭でも眺めているような陶然とした心持になった。

すべての音楽がそうであるか、どうか、私には分らない。しかし、どうもこの管弦楽というものは、客観的分析的あるいは批評的に聴くべきものではなくて、ただこの音の醸し出す雰囲気の中に無意識に没入すべきもののような気がする。そうする事によってこの音楽が本当の意味をもつような気がする。

これが雰囲気である以上、それに一度没入してしまえば、もう自覚的にそれを聞いていなくてもいい。この空気の中で私は食事をし、書物を読み、また六^{むっ}かしい数学の問題を考える事すら可能なような気がする。

レオナルド・ダ・ヴィンチが画を描く時に隣室で音楽を奏でさせたという話があるが、これももちろんただ音楽の雰囲気だけを要求したものに相違ない。彼は恐ろしく多面的な

忙しい頭脳をもっていた人である。時としては彼の神経は千筋に分裂して、そのすべての末端がいら立って、とても落着いた心持になれなかったのではあるまいか。そういう時に彼は音楽の醸し出す天上界の雰囲気に含まれて、それで始めて心の集中を得たのではあるまいか。

これはただ何の典拠のない私だけの臆測である。しかしそれはいずれにしても、今の苛い立たしい世の中を今少し落着けて、人の心を今少し純な集中に導くためには、このような音楽も存外有効ではないだろうか。

こんな事を考えるともなく考えながら、私の心はいつか遠いわれわれの祖先の世に遊んでいた。

朗詠の歌の詞は「新豊しんぽうの酒の色は鸚鵡おうむ盃はいの中に清冷たり、長楽ちやうらくの歌の声は鳳ほうお凰管うかんの裏うちに幽咽ゆういんす」というのだそうであるが、聞いていてもなかなかそうは聞きとれないほどにゆつくり音を引延ばして揺曳ようえいさせて唱う。そしてその声が実際幽咽するでもないのか、どこか奥深い御殿のずっと奥の方から遙かに響いて来るような籠った声である。これは歌う人が口をあまり十分に開かず、唇もそんなに動かさずに、口の中で歌っているせいかもしれない、始めの独唱のときは、どの人が歌っているか、ちよつと見ては分

らないようであつた。

これもおそらく多くの現代人にはあまりに消極的な唱歌のように思われるかもしれない。もしそうであれば、それだけかえつて必要な解毒剤げどくざいかもしれない。

管絃のプログラムが終ると、しばらくの休憩の後に舞樂が始まつた。

一番目は「賀殿かてん」というのであつた。同じ衣装をつけた舞人が四人出て、同じような舞をまうのであるが、これもちようど管絃樂と全く同じようにやはり一種の雰囲気醸出する「運動の音楽」であるように思われた。外の各種の舞踊に表われるような動的エネルギーの表出はなくて、すべてが静的な線と形の律動であるように思われた。

二番目の「地久ちきゅう」というのは、やはり四人で舞うのだが、この舞の舞人の着けている仮面の顔がよほど妙なものである。ちよつと恵比寿えびすに似たようなところもあるが、鼻が烏く天狗てんぐの嘴くちばしのように尖つて突出している。柿の熟したような色をしたその顔が、さもさも喜びに堪えないといったように、心の笑みを絞り出した表情をしている。これが生きている人の本当の顔ならば、おそらく一分間あるいは三十秒間もそのままに持続する事は困難だろうと思われる表情をいつまでも持続して舞うのである。これは舞樂に限らない事であろうが、これだけの事でもそこに一種の空氣が出てくる。もっとも不思議な事に、仮面の

顔というものは、永く見ていると、それが色々に動き変わるような錯覚を生じるものだが、この場合でもやはりそれがある。音楽と運動の律動につれて、この笑顔にも一種の律動的変化を感じる事が出来る。

柿色の顔と萌黄色もえぎいろの衣装の配合も特殊な感じを与える。頭に冠とりかぶとった鳥冠とりかぶとの額に、前立まえだてのように着けた鳥の頭部のようなものも不思議な感じを高めた。私はこの面の顔の表情に、どこか西洋画で見るパンの神のそれに共通なものがあるような気がしてならなかった。

三番目は「蘇莫者そまくしや」というのである。何と読むのか、プログラムに仮名付けがないから分らない。説明書によるとこの曲はもと天竺てんじくの樂で、舞は本朝で作ったとのことである。蘇莫者の事は六波羅密經ろくはらみつぎように詳しく書いてある。聖徳太子が四十三歳の時に信貴山しぎさんで洞簫どうしょうを吹いていたら、山神が感に堪えなくなつて出現して舞うた、その姿によつてこの舞を作つて伶人れいじんに舞わしめたとある。

始めに、たぶん聖徳太子を代表しているらしい衣冠の人が出て来て、舞台の横に立つて笛を吹く。しばらくすると山神が出て来て舞い始める。おどろな灰褐色の髪の下に真黒な小粒な顔がのぞいている。色があまりに黒いのと距離が遠いので、顔の表情などは遺憾

ながら分らない。片手に何か短い棒のようなものを固く握っているが、これも何であるか分らなかった。しかし私にはそれはどうでもよい。面白いのはその運動である。頭の上で近付けた両手を急速に左右に離して空中に円を描くような運動、何かものを跨ぎ越えるような運動、何ものかに狙い寄るような運動、そういうような不思議な運動が幾遍となく繰り返された。

前の二種の舞がいかにもゆるやかな、のんびりとしたものであったのに反して、この蘇莫者にはどこかもう少し迫った感情のようなものが出ている。それは畢^{ひつきよう} 竟運動の速度、従ってエネルギーの差から起るものかもしれないが、そればかりでなく、この舞人の挙動自身に何かしらある感情の逼迫^{ひつぱく}を暗示するものがあるのかもしれない。それがどういう感情であるかと問われると私にも分らないが、しかし例えばある神性と同時にある狂暴性を具えた半神半獣的のビーイングの歓喜の表現だと思つて見ると、そう思えない事はない。私は遠い神代のわが大八洲^{おおやしま}の国々の山や森が、こういう神秘的なビーイングによつて棲まわれていたと想像してみた。そうして自分がそれらのビーイングの正統の子孫であると考えてみた。そう思う事によつてこの国土に対する自分の愛着の感情は増しても減りはないような気がする。

最後に「長慶子^{ちやうげいし}」という曲を奏した。慶祝の意を表わしたもので、参会の諸員退出の時にこれを奏すと説明書にあったが、そのためか、奏樂中にがたがた席を立つ人が続々出て来た。

近頃^のにない^の舒びやかな心持になって門を出たら、長閑^{のどか}な小春の日影がもうかなり西に傾いていた。

三 ノーベル・プライズ

ある夜いつものように仕事をしていると電話がかかって来た。某新聞社からだという。何事かと思つて出てみると、国際電報によつて昨年度と今年度のノーベル賞金の受賞者の名前の報知が届いた、その一人はアインシュタインで、もう一人はコーペンハーゲンのニールス・ボーアという人だそうだが、このボーアという人はいったいどんな人かという仕事をした人かというのである。私はなるべく簡単に自分の知つてゐる要点だけを話して電話を切つた。そしてやりかけた仕事にとりかかるとまた電話がかかった。今度は別の新聞社から同じ事の問合わせであつた。ボーアをまちがえてボーア／＼と云つてゐるのが氣に

なるので、それだけは訂正しておいた。

ボーアの理論の始めて発表されたのは一九一三年であつたから、もうちようど一と昔前の事である。その説はすぐに我^{わがくに}邦の専門家の間にも伝えられ、考究され、紹介され、応用もされていた。今日物理学に興味をもつ人でボーアの名前とその仕事の一般を知らない人はおそらく一人もないはずである。

ところがこれほど専門家の目には顕著な人物の名前が「世間」というものの人名簿には今日という今日までどこにもかいてなかった。それがノーベル賞の光環を頂いて突然天から降つて来た天使のように今「世間」の面前に立つている。十年前に出現した新星の光が今ようやく地球に届いたようなものである。

それほどに科学者の世界は世間を離れている。しかしそのおかげで学者は心静かに落着いて各自の研究に没頭していられるのかもしれない。

近頃かの地でボーアに会つて歸つて来た友人の話によると、このまだ若い学者は、どこか近い田舎に小さな別荘のようなものを有^もつていて、暇のあるごとにそこへ行く、そうして平和な周囲と新鮮な空気の中に想を練りペンを使う、どうかすると芝生の上に寝転が^つて他所^{よそめ}目にはぼんやり雲を眺めているそうである。そういう時に彼の頭には色々の独創的

な考えの胚子が浮んで来るのらしい。彼はそういう考え^{イデー}を書き止めておいては、それを丁寧^{イデー}に保存し整理しては追究して行くそうである。いかにもこの人にふさわしいやり方だと思ふ。過去の仕事のカタログを製したりするよりは、むしろ未来の仕事の種子の整理に骨折^{イデー}っているらしいのが、常に進取的なこの人の面目をよく表わしていて面白いと思う。

このようにしてこそ、彼のような学者は本当の仕事というものが出来るのではあるまいか。実に羨ましい境遇だと思わねばならない。

日本に限らずどこでも一体に学者というものは世間から尊重されないものだという説がある。この尊重という文字の意味が問題になる。

昔はとにかく今日では我邦ですらも科学というものの功利的価値は、理解されたというよりむしろ無理解に世間で唱道されている。その当然の結果として科学者はそういう意味で尊重されている。従つて科学者は自分の研究以外の事で忙しい想いをするように余儀なくされる。

科学者としては、世間に対する自分の義務として、出来得る限りは、世間からの要求に応じなければならないと考える人は、むしろ多数であろう。そう考える以上は、場合によつては自分の大事な研究時間をずいぶん思い切つて割いても世間の要求に応じるために忙

しい想いをし、従つてそれだけの心のエネルギーを余計に消磨させなければならぬ。

これは止むを得ない事かもしれない。そして私はそういう学者の犠牲的精神に尊敬を払う事を忘れないつもりである。

しかし学者とこれに対する世間とから全く飛び離れた第三者の位置に立つて見ると、これは世間というものが本当に学者を尊重し學術の進歩を期図する方法ではないような気がする。場合によつてはむしろ学者を濫用し科學の進歩を妨げるような結果になる事がないとは限らないように思う。これはよほど慎重に考えてみなければならぬかなり大事な問題である。

学者の中にも科學の応用に興味を有ち、その方面に特別の天賦を具そなえている人がある。また一方では純理的の興味から原理や事實の探究にのみ耽ふける人もある。中には両方面を併せて豊富に有もつてゐる多能な人もないではない。

ボーアのごときはむしろこの第二のタイプの学者であるように思われる。従つて世間からうるさく取りすがられ驅使される事なしに、そつとして構わないでお願いしてもらふ事に最大の幸福を感じるたちの人ではなからうかと想像される。こういう型の学者があるとすれば、それを世間が本当に尊重するつもりなら、やはりはたから構わないで自由に芝生に寝

転がつて雲を眺めさせておく方がいちばんいいだろうと思う。

そう云えばアインシュタインなども本来はやはりそういう型の学者のように私には思われる。ところが幸か不幸か彼も数年前から世間の眼の前に押し出された。そのために人のよく知る通り恐ろしく忙しいからだになつてしまった。もつとも彼自身はそれを自分の楽しい義務のように考えているかのように見える。そして少しの厭な顔もしないで誰でも要求を満足させるために忙殺されているように見える。これは美しい事である。

しかし純粹に科学の進歩という事だけを第一義とする立場からいうとこれは少しアインシュタインに氣の毒なような氣もする。もう少し心とからだの安息を与えて、思いのままに彼の欲する仕事に没頭させた方が、かえつて本當にこの稀有な偉人を尊重する所以であり、同時に世界人類の眞の利益を図る所以にもなりはしまいか。これも考えものである。今度のノーベル・プライズのために不意打ちをくらつた世間が例のように無遠慮に無作法にあのボーアの静かな別墅を襲撃して、カメラを向けたり、書斎の敷物をマグネシウムの灰で汚したり、美しい芝生を踏み暴したりして、たとえ一時なりともこの有為な頭の安静をかき乱すような事がありはしないかというような氣がする。そんな事がありそうである。そしてそうあつては困ると思う。しかし当人は存外平氣で笑っているかもしれない。

もし誰かがカントを引っぱり出して寄席よせの高座から彼のクリティクを講演させたとしたらどうであつたろう。それは少しも可笑おかしくはないかもしれない、非常に結構な事ではあるうが、しかしそれがカントに気の毒なような気のするだけは確かである。

私はただ何という理窟なしにボーアの内面生活を想像して羨ましくまたゆかしく思つていた。そしてそのような生活がいつまでも妨げられずに平静に続いて行つて、その行末永い途上に美しい研究の花や実を齎もたらす事を期望している。

（大正十二年一月『中央公論』）

四 切符の鋏穴

日比谷止まりの電車が帝劇の前で止まった。前の方の線路を見るとそこから日比谷まで十数台も続いて停車している。乗客はゾロゾロ下り始めたが、私はゆっくり腰をかけていた。すると私の眼の前で車掌が乗客の一人と何かしら押問答を始めた。切符の鋏はさみ穴あながちがつているというのである。

この乗客は三十前後の色の白い立派な男である。パナマらしい帽子にアルパカの上衣を

着て細身のステッキをさげている。小さな声で穏やかに何か云っていたが、結局別に新しい切符を出して車掌に渡そうとした。

二人の車掌が詰め寄るような勢いを示して声高こわだかにものを云っていた。「誤魔化ごまかそうと

思ったんですか、そうじゃないですか。サア、どっちですか、ハッキリ云って下さい。」

若い男は存外顔色も変えないで、静かに伏目がちに何か云いながら、新しい切符を差し出していた。車掌はそれを受取ろうともしないで

「サア、どっちです。……車掌は馬鹿じゃありませんよ」と罵ののった。

私は何だか不愉快であつたからすぐに立つて車を下りた。

あの若い立派な男がわずかに一枚の切符のために自分の魂を売ろうとは私には思いにくかつた。しかしそれはどうだか分らない事である。

それにしても私はこの場面における車掌の態度をはなはだしく不愉快に感じた。たとえ相手の乗客が不正行為をあえてしたという証拠らしいものがよほどまでに具備していたにしても、人の弱点を捕えて勝ち誇つたような驕きやうまん慢まんな寧どうあく悪な態度は醜い厭な感じしか傍観している私には与えなかつた。ましてそれが万一不正でなくて何かの誤謬ごびゆうか過失から起つた事であつたら果してどうであらう。もしも時代と場所がちがつていて、人が自分

の生命に賭けても Honour を守るような場合であつたらこれはただではすみそうもない。

こんな事を考えて暑い日の暑苦しい心持をさらに増したのであつた。

それから四、五日経つての事である。私は乙町まで用があつて日盛りの時刻に出掛けて行つた。H町で乗つた電車はほとんどがら明きのように空いていた。五十銭札を出して往復を二枚買つた。そしてパンチを入れた分を割き取つて左手の指先でつまんだままで乗つて行つた。乗つて行くうちに、その朝やりかけていた仕事のつづきを考えはじめて、頭の中はやがてそれでいっぱいになつた。そういう時に私の悪い癖で、何かしら手に持つてゐるものを無意識にいじる、この時は左の手の指先で切符の缺穴のところをやはり無意識にいじつていたのである。これはどういう訳だか分らないが、例えば盲人が暗算をやる時に無意識に指先をふるわしているといくらか似た事かもしれない。

乙町の停留場で下りようとして切符を渡すと、それをあらためた車掌が、さらにもう一つパンチを入れてそれと見較べて「これはちがいます、私のよりは穴が大きい」と云つた。私は当惑した。「でも、さつき君が自分で切つたばかりではないか。」こんな証拠にもならない事を云つてみた。

切り立ての缺穴は円形から直角の扇形セクトルを取りのけた格好をしている。私の指先でもみ

掘られた穴にもその形の痕跡だけはちゃんと残っているが、穴の直径が二、三割くらいは大きくなって、穴の周辺が毛ば立ち汚れている。

もう一人の車掌もやって来て、同じ切符にもう一つ穴をあけた。「私のはこれですからね」と云って私の眼の前にそれを突きつけた。三つの穴が私を脅かすように見えた。

代りの切符をもう一枚出して下ろしてもらった方が簡単だとは思った。が、その時の私の腹の虫の居所がよほど悪かったと見えて、どうもそういうあつさりした気になれなかった。別の切符を出すのはつまり自分の無実の罪を承認する事になるような気がしたので、私はそのまま黙って車を下りてしまった。車掌は踏台から乗り出すようにして、ちよつと首をかしげて右の手でものを捧げるような手つきをしながら「もう一枚頂きましょう」と云ってニヤニヤした。

下り立った街路からの暑い反射光の影響もあつたろうし、朝からの胃や頭の工合の効果もあつたかもしれないが、とにかくこの車掌の特殊な笑顔を見た時に私の全身の血が一時に頭の方へ駆け上るような気がした。そして思い返す間のないうちに

「それじゃあ、交番へ来てくれたまえ」とついこんな事を云ってしまった。交番はすぐ眼の前にあつた。公平な第三者をかりなければ御互いの水掛論ではとても始末が着かないと

思ったのである。車掌は「エエ、参りますよ、参りますとも、いくらでも参りますよ」とそう云って私について来た。

警官は私等二人の簡単な陳述を聞いているうちに、交番に電話がかかって来た。警官はそれを聞きながら白墨^{はくぼく}で腰掛のようなどころへ何か書き止めていた。なかなか忙しそうである。私は少し気の毒になって来た。

警官は電車を待たさないために車掌の姓名を自署さしてすぐに帰した。それから私に「貴方^{あなた}御いそぎですか」と聞いた。私はこの警官に対して何となくいい感じを懐^{いだ}くと同時に自分の軽率な行為を恥じる心はかなり強く起った。

ここで自白しなければならぬ事は、私等が交番へはいると同時に、私は蟻^{がまぐち}口の中から自分の公用の名刺を出して警官に差出した事である。事柄の落着を出来るだけ速やかにするにはその方がいいと思つてした事ではあるが、後で考えてみると、これは愚かなそして卑怯^{ひきよう}な事に相違なかつた。そしてこの上もない恥曝^{さら}しな所行であつたが、それだけ私の頭が均衡を失つていたという証拠にはなる。

警官の話によるとこの頃電車では缺穴の検査を特に嚴重にしているらしいという事である。そして車掌の方では缺穴ばかりを注目するのだから止むを得ないというのである。そ

う云われてみると私は一言もない。

そのうちに電車監督らしい人が来た。こういう事に馴れ切っているらしい監督はきわめて愛想よく事件を処理した。「決して御客様方の人格を疑うような訳ではありませんが、これも職務で御座いますからどうか悪しからず御勘弁を願います」と云う。こう云われてみると私はますます弱ってしまうのであった。私は恐縮して監督と警官に丁寧に挨拶して急いでそこを立去った。別の切符は結局渡さなかったのである。

仕合せな事には、こういう場合に必然な人ばかりは少しもしなかった。それで私がこんな事を書かなければ、私のこの過失は関係者の外には伝わらないで済むかもしれない。

私はその日宅へ帰^{うち}つてから、私には珍しいこの経験を家族に話した。すると家族の一人は次のような類例を持ち出してさらに空談に花を咲かせた。

この間子供等大勢で電車に乗った時に回数切符を出して六枚とか七枚とかに鋏を入れさせた。そして下車する時にうっかり間違えて鋏を入れないのを二、三枚交ぜて切つて渡したらしい。それで手許にはそれだけ鋏の入ったのが残っていた訳である。そうとも知らず次に乗車した時にうっかり切符を渡すとこれは鋏が入っていますよと注意されてはなはだきまりの悪い思いをしたそうである。その時の車掌は事柄を全くビジネスとして取扱った

からまだよかったが、隣に坐っていた人が妙にニヤニヤしていたという事である。

この場合も全然乗客の方の不注意であつて車掌に対しては一言の云い分もない。

電気局から缺穴の検査を励行するように命令し奨励するとすれば、車掌がこれを遂行するのは当然の事である。そして車掌の人柄により乗客の種類によりそこに色々の場面が出現するのは当然の事である。

私は自分の落度おちどを度外視して忠実な車掌を責めるような氣もなければ、電気局に不平を持ち込もうというような考えもとよらない。

しかしこの自身のつまらぬ失敗は他人の参考になるかもしれない、少なくとも私のように切符の缺穴をいじつて拡げるような悪い癖のある人には参考になる。同時にまた電気局や車掌達にとつても、そういう厄介な癖を持った乗客が存在するという事実を知らせるだけの役には立つと思う。

ついでながら、切り立ての缺穴の縁辺は截せつ然ぜんとして角立かどだっているが、揉もんで拡がった穴の周囲は毛端立けぼだつてぼやけあるいは捲めくれて、多少の手垢てあかや脂あぶら汗あせに汚れている。それでも多くの場合に原形の跡形だけは止めている。それでもしこのように揉んだ痕跡があつて、しかも穴の大きさが新しい穴と同じであつたら、それはかえつてもとの穴がちがつ

た鋏によつて穿^{うが}たれたものだという証拠になる。

私はそういう変形した鋏穴の「標本」を電気局で蒐集して、何かの機会に車掌達の参考に見せるのもいいかもしれないと思う。何なら虫眼鏡で一遍ずつ覗^{のぞ}かせるのもいいかもしれない。ついでにもう一步を進めるならば、電車の切符について起り得る錯誤のあらゆる場合を調査しておくのもいいかと思う。不正な動機から起るものの外に、どれだけ色々な場合があるかを研究し列挙して車掌達の参考に教えておくのも悪くない。事柄が人の「顔」にかかる事であるから、このくらいの手を足すのも悪くはあるまい。

車掌も乗客も全く事柄を物質的に考える事が出来れば簡単であるが、そこに人間としての感情がはいるからどうも事が六^むかしくなる。

物質だけを取扱う官衙^{かんが}とちがつて、単なる物質でない市民乗客といったようなものを相手にする電気局は、乗客の感情まで考えなければならず、そして局の仕事が市民に及ぼす精神的効果までも問題にしなければならぬから難儀であろう。

しかしこれは止^やむを得ない事である。事柄は小さなようでも電車切符の穴調べも遣り方によつては市民の頭の中に或るものをつぎ込み、その中から或るものを取り去るような効果がないとは限らない。

例えばわれわれが毎日電車に乗る度に、私が日比谷で見たような場面を見せられるとしたらどうだろう。おそらくわれわれの「感情美」に対する感覚は日に日に麻痺^{まひ}して行きそ
うである。

百千年の後に軽率な史家が 春^{しゅん} 秋^{じゅう} の筆法を真似て、東京市民をニヒリストの思想に導いた責任者の一つとして電気局を数えるような事が全くないとは限らないような気もする。十幾年前にフィンランドの都ヘルシンギフォルスへ遊びに行った時に私を案内して歩いたあちらの人が、財布から白銅貨のような形をした切符を出して、車掌というものの居ない車掌台の箱に投げ込むのを見た。つまらない事だが、私が今でもこの国この都を想い出す時に起る何となく美しい快い感じには、この些細^{ささい}な事もいくらかを寄与しているように思う。

諸国を旅してみてもいったん売った電車切符をまた取り戻すような国は稀であつた。それで私は国々で乗った電車切符を記念に集めて持ち帰る事が出来た。この妙な機会に私はこれで張り交ぜの屏風でも作つて「人を盗賊と思わない国々」の美しい想い出にしようかと思つている。

五 善行日と悪行日

ある日新聞を見ていると妙な広告が眼についた。「サーモンデー」と大きな字で印刷してある。何かの説教でもあるかと思つてよく見ると、それは Sermon でなくて Salmon day であった。鮭の罐詰^{かんづめ}を食う日で、すなわちその罐詰の広告のようなものと判断された。そうしてそれが当日行われたいわゆる「節約デー」に因^{ちな}んだものだという事に気が付いた。鮭と節約との関係は別問題として、私にはこの「節約デー」という文字自身が何となく妙な感じを与えた。その感じはちよつと簡単に説明し難い種類のものである。それはつまりこれから以下に私が書くこうとする事を煎^{せん}じつめたような妙なものであった。

歳のうちのある特定の日を限つて「節約デー」を設けるといふ事は、従来の多くの日には節約をしていないか、もしくは濫費をしていたという事である。同じような例を挙げると、年中怠けてばかりいる学生が、一年に一日「勉強デー」を設けるのや、あるいは平生悪い事ばかりしている男が、稀に「善行デー」を設けると同じような事で、それも一応は誠にいい事だと思われる。

しかし一日の善行で百日の悪行を償つてまだその上に釣銭をとるような心持が万一でも

あつてはかえつて困る。一体そういう心配は全然ないものだろうか。一般には云われなくてもそういう了^{りようけん}簡の人もまるでないとは云われないうのである。

そういう事のないように、その特別な一日を起点としてその後引続いて善い事をする習慣をつけるという目的で、少なくとも今度の「節約日」は宣伝され奨励されたものであらうと思われる。そうでなければ宣伝ビラの印刷費用だけでもかえつて濫費になる勘定である。この度の節約日の効果は日が経つてみなければ分るまいが、私はこういう「日」の必要自身が既に結果の失敗を保証するように思われて仕方がない。

それはとにかくこの種の色々の「善行デー」はどうもつい近頃西洋から輸入されたものらしく私には思われる。よく調べてみなければどうか分らないが、何となくアメリカあたりからでも来たらしいような感じのするものである。少なくともそういう匂いがある。

昔の事はよくは知らないが、ただ自分の狭い経験から考えても、以前にはこういう特別な「善行デー」などよりむしろ「悪行デー」とでも名づくべきものが多かったような気がする。

田舎の農夫等が年中大人しく真面目に働いているのが、鎮^{ちんじゆ}守の祭とか、虫送りとか、盆踊りとか、そういう機会に平生の箍^{たが}をはずして、はしゃいだり怠け遊んだりした。近年

は村々に青年会などという文化的なものがあるからおそらく昔のような事は見られまい。また私の郷里では昔天長節の日に市の公園で「お化け」と称する仮装行列が行われた。これも真面目な勤勉な市民が羽目をはずして怠け巫山戯る日であつた。これは警察の方でとうに制限を加えたようである。

どんな勤儉な四民も年に一度のお花見には特定の「濫費デー」を設けた。ある地方の儉約な商家では平日雇人のみならず主人達も粗食をしていて、時々「贅沢デー」を設けて御馳走を食つたという話もある。もつともこれは全く算盤そろばんから割り出した方法だそうではあるが。

「無礼講」という言葉が残っており、西洋でも「エプリルフル」という事がある。

あれほど常識的な英国にでもわれわれに了解の出来ないほど馬鹿げた儀式が残っているようであるが、それが今日では単に国粹保存というような意味ばかりでなく、つまり、常に常識的であるための「非常識デー」として存在の価値を保っているらしく私には思われる。

「濫費日」や「嘘つき日」や「怠け日」はあまり聞えはよくないかもしれないが、実はこれらの特定日の存在は平日の節約勤勉真面目を表白するとすれば目出度めでたい事である。そし

てそういう場合に行われるこれらの「デー」の効果は必ずしも悪いばかりとは思われない。たとえ今日のような世の中でも、場合によってはかえってこの頃のいろいろの人聞きのいいデーに勝る事がないとも限らない。今の人でもおそらく年中悪い事ばかりはしていまい。危険な崖の上に立っている人を急に引止めようとするとかえって危険だという話がある。これと似た事がもし適用するとすれば、濫費に偏しているものを一日だけ引き戻すのはかえって危険な場合があるかもしれない。後に引いた弓を放てば矢は前に飛ぶ。しかしこの類推はこの場合にあてはまるかどうかそれは分らない。

それにしても「節約デー」という言葉が私にはやはり不思議な感じを与える。もしこれが反対に「濫費デー」であつたらその意味は私にはかえって呑み込みやすく、その効果も見当がつくような気がする。

世の中の人の心は緊張と弛緩しかんの波の上に泛ただよっている。正と負の両極の間に振動している。「善行日」ばかりを奨励するのも考え物ではあるまいか。少なくとも「悪行日」をこれと並行錯雑させて設けてみるのも一つの案ではあるまいか。昔の為政家は実際そういう事をしたもののように見える。

しかし私のこの案はやはり賛成してくれる人はなさそうである。私のいうような「悪行

日」はだんだん廃止される。最近にはまた勉強の活勢力を得るための潜勢力を養うべき「怠け日」であつた暑中休暇も廃止されるくらいであるから。

（大正十一年九月『中央公論』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第三卷」岩波書店

1997（平成9）年2月5日発行

入力：Nana ohbe

校正：noriko saito

2004年9月25日作成

2005年11月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雑記（1 [# 「1」 はローマ数字、1-13-21] ）

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>